

全てのヤンデレを愛する者達に捧ぐ

知らず知らずのうちにディスプレイに見入っていたのだろうか、腫の奥が少し痛んだ。

飲み物を取りに立ち上がりざま、戸田泰介が時計を見れば、時計の針は既に深夜三時を回ろうとしていた。

いくら時間に自由がきく身分とはいえ、それにも限度がある。平日のこんな遅くまでメッセンジャーソフトでネット越しに話し込むなど、まともな学生のやる事ではない。

改めて、画面に残る会話の名残を眺める。

shino ・今日もありがとう。

shino ・ブライトさんの読解力には本当に感心です〜！

ブライト・こちらこそ こんな時間まで付き合ってもらって乙
また今度機会があればぜひお話を

shino ・もちろんです そろそろ遅いので もう落ちます〜

ブライト・でわでわ

「彼女」すなわち shino とこうやって話すようになったのは、1年ほど前からだ。

最初は、ブライト……泰介のブログへのコメントの書き込みだった。やりとりが始まってすぐに、泰介はその鋭い指摘に舌を巻くことになる。

誰からの反応もなく、ひっそりとある海外作家の作品についての考察や批評を載せていた自分のブログ。手慰みのようなことで、こんなに高度な議論を展開できる人物と出会えるとは。

向こうも泰介と同じ作家のファンサイトを運営している事を知り、泰介と彼は掲示板やメールで語り合うようになる。そんな二人のやりとりが、即時の反応の可能なメッセンジャーツールを通じてのものに変わるのに時間は掛からなかった。

そして、コメントの彼が実は女性らしい言うことを知ること
を泰介が知ったのもその時だ。

キッチンでのどを潤し、身体を引きずりベッドへ向かう。

肉体的にはさほどではないが、メッセンジャーでの shino との議論による頭脳の疲れをどこか心地よく感じつつ、泰介は眠りに落ちていくのだった。

*

迷いのない足取りで学生街の裏路地を抜け、彼女はそのくたびれたアパートの前に立つ。築二十年にもなろうかという古びたたたずまいと、髪型から靴先までそつなくまとまった彼女の外見はあまりにもそぐわない。

ゴミ出しがてら犬の散歩をさせていた男が、通り過ぎざまその姿に気付き驚きに目を見開く。脇目もふらず二階の角部屋を
目指し階段を足早に上る彼女は、それを気にとめもしない。

目指す部屋の手前から新聞を取りに顔を出した青年が足音に気付いて振り向き、いかげん見飽きたとばかりにかぶりを振って自室に戻ってゆく。

もちろん、彼女にとつてこれら全ては些末なこと。全ては目の前の塗装のはげたアパートのドア、その向こうで惰眠をむさぼる男のためだ。

「泰介！ たーいーすーけー!! あー、だめね。」

泰介、中に入るからね！ 着替えても知らないわよ!」

しばらく呼びかけた後、ためらいのない動作でハンドバッグから合い鍵を取り出し、立て付けの悪いドアを絶妙な力のいれ加減でスムーズに開く。

その奥の散らかった部屋のベッドの上では、ドアから吹き込む初冬の冷気に目をしばたく青年が、あきれたように彼女の姿を見つめていた。

「泰介はいつも寝てばかり。今日が大事な研究成果報告会の日だつて覚えてた?」

「ちよつと寝坊しただけじゃないか。開始時間までに学校に着いてればいいんだよ。みのりちゃんはいつも細かすぎ」

「何よ、それが寝坊した自分を起こしに来てくれた美人の共同研究者にする物言いかしら」

「本当の美人はね、自分で美人なんて言わないんだよ。つまり君は残念な……」

「泰介、そういう事は、自分の顔を見てから言った方がいいわよ」

二人で大学へと急ぎながら、彼女……朝霧みのりのふだん通りの物言いに、泰介は苦笑した。

配属前の研究室見学に訪れた彼女の美少女ぶりに度肝を抜かれた頃から、もう1年になるだろうか。

泰介の後輩として研究室に配属された後、研究テーマが似通っていたことから共同で研究を進めていく事になり、彼女の面倒を見るようなり。

めきめきと頭角を現した彼女に何時しか追い越され、冬の足音が近づく今では一学年下の彼女に面倒を見られていると言った方が正しいかも知れなかった。

「トラッドだっけ? そんな外国の作家なんかにつつを抜かすのは、きちんと研究で成果を出してからにして欲しいわね」
「トラウト。キルゴア・トラウトだよ、みのりちゃん。いいかげん覚えてよ」

「そんなのどうだつていいじゃない。トラウコだろうがトランドだろうが、私には関係ない事だし」

身も蓋もなく言い放ちながら、まるで泰介が自分に付いてくるのを当然の事のように一歩前を歩く彼女の姿を改めて眺める。

派手に巻かれ、高い位置で結われた明るい茶色の長い髪。一見地味なようであり、よく見れば造りの良さが際だつタートルネックの上着と、それを押し上げる男たちの視線を惹き付けて

やまない胸のふくらみ。膝丈のスカートから伸びるブーツに包まれた脚は、まるでモデルと見まがうほどにすらりとしていた。

さらに、上から羽織ったコートの絶妙な着崩しが、彼女のゼンズを際立たせている。普段着はもちろんの事、実験の際に着用する白衣ですら彼女にかかれはその知性と美しさを引き立てる物になってしまふのはもはや天性のなせる技だろう。

足早に歩くみのりの一步後ろに付いていきながらだと、そんな彼女が道行く男たちの視線を一手に集めているのがよく判る。そして、その次に自分へ向いた視線が「どうしてこんな奴が一緒に？」という疑問へと変わるのも。

大学院生であるため大学生活のほとんどを研究室で過ごす、つまり共同研究者のみのもりとも行動を共にする時間の多い泰介にとつて、そんな視線はもはや日常の一部となったものだ。しかし、慣れている事とそれをどう思うかは別問題だった。

「泰介、急がないと研究報告会に間に合わなくなるわよ」
振り返ったみのりが急かす。

自分達二人が周囲からどう見られているかまるで頓着していないその調子に、気持ち切り替える。そう、自分はあくまでも彼女の共同研究者であつて、それ以上でもそれ以下でもない。よく起こしに来てくれるのもサボりがちな自分をきちんと大に行かせるため、たまの休日に買い物や食事に連れ回されるのも彼女のストレス解消のためだ。

なにより、周囲にはその美貌に見合ったそれなりに丁寧かつ

慇懃無礼な態度で接する彼女が、自分にだけは雑な扱いに終始するということと、既にどう思われているのかが判るといふものだった。

「……………このように、本酵素が一連の反応内で果たす役割についてはほぼ検証は終了しています。現在追試を行っている所であり、成果が出しだいまじめに入ろうと考えています。

また、これに伴い見つかった興味深い現象としては次のようなものがあり……………

それでは、今回の発表を終わります。こんな所でしようか？
先生」

「素晴らしい、素晴らしいよ朝霧君。これをうちの学科の卒業研究だけで終わらせるなんて、宝の持ち腐れも甚だしい」
月に一回の研究成果報告会の最後、みのりの発表が終わり、部屋を包む静寂を破つたのは老教授の喜色満面の声だった。

「ありがとうございます先生。これも先生の指導のたまものですわ」

「いや、私が君に提供できたのはせいぜいこの設備くらいだ。学部4年のいまからこれなら、大学院に進んでからが恐ろしい。

来年の生化学会に出してみないか？ これなら若手優秀発表賞、それどころかこのまま発展させていけば柿内賞だって狙える。つくづく君をうちの研究室に引っ張ってきて良かった」

そして、一転して厳しい目で他の研究室のメンバーをにらむ老教授。

「で、それに比べて何だ。君たちのこの発表は。特に戸田、朝霧君との共同研究と言う事になっているが、この中にお前の成果なんて一つも無いじゃないか。院生のお前が、一年下の朝霧君におんぶにだっこでどうする……………」

みのりに向ける手放しの賞賛とは正反対の叱責が、彼女以外の全員の発表に及ぶ。彼らが解放されたのは、およそ1時間ほども経つてからの事であった。

「では、今日の報告会はこれで終了とします。先生、何か最後一言」

「次は一ヶ月後だ。朝霧君ほどの出来は元から期待していないが、せめてきちんと言問として成り立ったものを持ってこい。私を失望させるな」

吐き捨てるように言ったあと、足早に出て行く老教授と、それに慌てて付き従う助教。ドアが閉まり彼らの足音が遠ざかっていくと同時に、張り詰めていた空気がゆるんでいく。

最初に口火を切ったのは、報告会の間ずっとアシスタントを務めていた助手だった。

「お疲れさま、みんな。それにしてもまあ、先生も朝霧さんにえらくご執心な事で。私がここに来てから5年になるけど、あんなに喜んでるところを初めて見たよ」

「本当ですか？ だからと言って俺達をあそこまでするな」

くてもなあ」

「そうそう。何あの「私を失望させるな」って。そう言うのはもつと渋くて格好良い親父に似合う台詞で、あんな大学だけが人生のおっさんにいわれる筋合いは無いよ」

ひとしきり教授への悪態で盛り上がる院生達。日頃から教授陣の権威に押さえつけられている彼らにとって、これは貴重な息抜きの時間だった。

「しかし、朝霧さんは本当にたいしたものだよ。俺達が学部生だった頃なんて、ただ怒られないようにするだけでもう精一杯」

「戸田も災難だよな。皆の前であんなにこき下ろされて」

「朝霧さんと比べられたら、戸田に限らず俺達は全滅だろうけどさ」

「まあ、俺がぼろくそに言われるのはいつもの事だから。それに、こう見えてみのりちゃんにも結構助けてもらってるんだよ」

苦笑いを浮かべながら、泰介は仲間の慰めに応える。

「泰介はあのくらい怒られないと、全然働いてくれないものね。でも、今回は結構助かったわよ。あくまでも泰介にしてはだけど」

フォローになつていないみのりの言葉。だが、それが彼女なりの感謝であることは、そろそろ1年を共に過ごす泰介には判っていた。

「では皆さん、お疲れさまです。私はちよつと用事がありま
すので。泰介!! ほら行くわよ!!」

研究室の先輩達への挨拶とは態度をがらりと変えて急かす
のりに、泰介は押し出されるように部屋を出て行く。

「女帝と、その付き人のお帰りだ。いつも思うんだけど、あ
の二人って付き合ってるのかね?」

「さあ? 戸田に聞いてもはぐらかされるだけだし、女帝様
にそんな質問をする勇氣は俺にはないない」

「いくら共同研究者とはいえ、戸田にだけやたらなれなれし
いものな、女帝様は」

「あれは馴れ馴れしいと言うより暴言じゃないか?」
「でもなあ、世の中には「美女と野獣」って言葉もあるし、
意外とあり得るかも……」

「あの二人の場合、「美女かつ野獣」って感じですね。戸田君
が野獣だなんてとでもとでも」

沈黙を守っていた助手がふと漏らした言葉に、皆が吹き出す。
そんな彼らの笑い声は、廊下を二人騒がしく会話しながら歩
く泰介とみのりに聞こえる事はなかった。

*
*
*

shino

・買えなかったです。秋葉原なんかではもう早売りして
るんでしょうけど、私の居るところではまだ入荷しな
いみたいで

最近発売された本についてから、日常の愚痴まで。出会った
当初は共通の趣味であるトラウトの作品についてだけだった二
人の会話も、最近ではそれ以外の分野にも広がっていた。

その口ぶりが、shino が自分と同年代の女性なのではないか
と感じさせていた。だが、不思議と彼女と話すのに気負いはな
かった。

むしろこれは、泰介が普段いちばん身近に接している女性が
みのりだと言う事も影響しているのは自覚している。みのりと
比較すれば、並大抵の女性は付き合いやすいタイプに入ってし
まうことだろう。

shino ・で、その本屋が

shino ・大学の近くにあるからって 古くさい専門書みたいなの

ばっかり揃えてるんです。そんなの学内で買えるのに
ブライト・「大学の近く」というのがブライドになっているのかと

ブライト・こっちも似たような本屋があつて「立ち読みお断り た
だし勉強目的を除く」なんて張り紙出してた

ブライト・そういうえば きょう「Spyer Sheeps」の新作を買いに行
ったら無かつた shinoさん買えましたっ